OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ネットワーク型まちづくりのグループ・ダイナミックス |
| Author(s) | 山口, 洋典 |
| Citation | 大阪大学, 2005, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/2411 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

| | |
|---|---|
| 氏名 | 山口（やまぐち）　洋典（ひろのり） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（人間科学） |
| 学位記番号 | 第　19152　号 |
| 学位授与年月日 | 平成17年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当<br>人間科学研究科人間科学専攻 |
| 学位論文名 | **ネットワーク型まちづくりのグループ・ダイナミックス** |
| 論文審査委員 | （主査）<br>教授　堤　修三<br>（副査）<br>教授　内海　成治　　助教授　渥美　公秀 |


## 論文内容の要旨

本研究は、大阪市内でも個性豊かな歴史や生活文化を持った地域「上町台地」をフィールドに取り組まれた協働的実践である。地域におけるまちづくり活動のネットワーキングに取り組んでいる「上町台地からまちを考える会」の参与観察をとおして、そのネットワーキングの過程において集合体の動態にどのような変遷が見られたかを「長縄跳び」のメタファーを用いて検討した。観察期間は2002年1月から2004年12月で、組織の立ち上げからその変遷について参与観察を行った。

論文は6章で構成されている。第1章ではまちづくりとは何かをグループ・ダイナミックスの立場から整理し、第2章ではグループ・ダイナミックスにおいて取り扱う「語り」においてメタファーに着目することの可能性を概括した。第3章からが事例であり、本研究が取り扱う対象地域の概要をまとめた上で（第3章）、都心部における地域活性化においてネットワーク型の活動主体がどう形成されるかについてエスノグラフィーをまとめた（第4章）。

ネットワーク型のまちづくりの実践においては、⑴縄の同期が始まる（組織の形成過程）、⑵縄を連結する（事業の形成過程）、⑶縄を交替でまわす（理事の役割分担）、⑷縄を綯う（事業の確立）、⑸縄の長さを変える（事業と組織の再構築）、⑹跳躍する場に注意を払う（地域と拠点への関心）というような変遷を見た。跳ぶ人、廻す人、短縄の連結、縄の長さ、縄の軌跡、跳躍の場といった二次メタファーも用いて、組織化の各段階に意味を探ってきた。

具体的に、その変遷過程を、「長縄跳び」のメタファーをもとに、理論的に考察してみると、次のようになる。第一段階は、組織の命名をとおして、地域と集合体への愛着を深める時期であった。第二段階は、ある集合体における集合性と異質性が顕在化し始める。どれとどれの親和性が高いのか、団体や専門家の組み合わせによって、適宜二次モードに至りながら全体としての構造を生みだそうと個人が際だつ実践が行われていた。第三段階になると、AがBに何かを伝えるという形式ではなく、Aが携わる実践を巡って、BやCも包まれる新たな「かや」を協働により構築し始めた。第四段階では、自分のことは自分の経験世界の中にある言語でしか語れないということを踏まえて、さて自分たちがどうするか、ということを意識し始めたのである。第五段階では、大きな集合性Xの存在に向き合い始めた。そして、第六段階では、その集合性に包まれない人々とどのように向き合うのかを検討し始めた。以上のように、「長縄跳び」のメタファーを用いることが、組織における構成員の共同性が事業のあり方を規定し、組織化の展開を観察可能なものにすることを、第5章にて確認した。

これらの考察をとおして、第6章では、「長縄跳び」のメタファーがグループ・ダイナミックスの理論としてどの

ような貢献できたのか、以下の４点について整理した。リーダーとフォロワーの共同性の承認の可否や有無が組織化プロセスを左右するという「(1)リーダーとフォロワーの相即の問題」、両者の相即のタイミングを取り扱う「(2)ネットワーキングの速度調整の問題」、共同性の相互承認における集合流の重視という「(3)文脈拡張における個人モデルの廃棄」、そしてネットワーク型組織の展開において共同性を承認する契機を取り扱うことを「異質性の現前の問題」と名付けた。

本研究は、まちづくりそのものの概念を深めているわけでもなく、NPO の組織論を検討したものではなく、外部参入者の内在化の過程をエスノグラフィーで追いながら、その集合流の変化を「長縄跳び」のメタファーで理論化を試みたものである。このような理論化を図るなかで、現場では失敗とは言わないものの多くの困難に向き合うことになったが、「長縄跳び」メタファーの獲得によりその局面毎のセンスメーキングの手段として活用できた。この点が本研究における実践的な貢献であった。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、都心部の地域活性化に関するネットワーキングにおいて主体がいかに組織化されるかを、アクションリサーチに基づき、グループ・ダイナミックスの観点から検討したものである。３年に及ぶ参与観察をとおして、都心部におけるネットワーク型まちづくりは、第一にリーダーとフォロワーの共同性の承認の可否や有無が取り組み主体の組織化プロセスを左右すること、第二に組織化の進展にはリーダーとフォロワーが相即し合う契機に着目することが重要であること、第三に実践の意味創出を行う上では個人モデルが棄却されなければならないこと、そして第四に集合体における異質性の現前が集団の共同性を承認する契機となりうること、以上４つの構成要素に着目することで効果的な実践を喚起できることを、協働的実践の成果として結実させている。

本論文は、メタファー使用について解釈者の視点に注目し、メタファーが集合体における共同性を承認し合う手段になるという、新たな理論的観点をグループ・ダイナミックスに提供した。特に、研究者自身がまちづくりの実践における外部参入者として内在化する過程をエスノグラフィーで追い、集合体の動態にどのような変遷が見られたかについて、「長縄跳び」のメタファーを導入したことは、都市計画分野のまちづくりに関する新たな概念や、ボランティア活動や NPO の組織論にも新たな理解と知見をもたらすものである。以上の理由より、本論文は、博士（人間科学）の学位の授与に十分に値するものであると評価しうる。